

## 新しい研究員の紹介

●五月二十一日（月）に辞令交付式が行われ、新たに鳥取環境大学大学院環境経営研究科環境学専攻教授の浅川滋男氏が中村元記念館の研究員に就任されました！

**浅川 滋男**（民族建築／建築考古学）



一九七九年のミクロネシアでのフィールドワークを皮切に、研究生生活の前半は中国、東南アジア、シベリアなどで民族建築学的な調査研究に没頭していました。比較住居論といふべきその種の研究には今も愛着があります。一九八七年に奈良国立文化財研究所に入所し、平城京の発掘調査に携わるようになつたので、薬師寺・西大寺・西隆寺・大乘院などの発掘にも参加しましたが、個人的な好奇心の中心は依然として住居にあり、民族建築を比較材料にできる縄文・弥生時代の住居集落の復元研究に傾いていきました。いつしか建築考古学の比重が膨らみすぎていることを反省するようになり、今は若干セーブしています。ちなみに、山陰では田和山・妻木晚田の復元建物が私の仕事ですし、なにより忘れないのは出雲大社境内遺跡巨大本殿の復元研究です。復元模型は島根県立古代出雲歴史博物館に展示されています。

こうした研究人生が仏教に転換していくきっかけとなつたのは、摩尼寺「奥の院」遺跡（鳥取市覚寺）に出会つてからです。山上に近い奥の院に巨巖を穿つ岩陰仏堂と平場が残り、二〇一〇年に四ヶ月かけて発掘調査をおこないました。この結果、奥の院の開山は円仁伝承よりも新しい十世紀中期に下り、室町後期以降は岩陰と複合する大きな懸造（かけづくり）仏堂が二棟建つていたことが分かりました。岩陰・岩窟と複合する懸造仏堂は三仏寺投入堂、鰐淵寺浮浪滝藏王堂など山陰に類例が多く、その系譜を探るべく、中国・西域・西インドなどの石窟寺院等をみてまわりました。各地の石窟寺院のスタイルは多様ですが、その多様性は「窟（いわや）」の建築化というフレームで説明可能だと考えるようになります。洞穴や岩窟に一般寺院建築の意匠を導入することで「窟（いわや）」が「岩屋」に変貌するという発想です。

このような活動を続けながら、気がつけばブータンの地に毎年通うようになって今に至ります。ブータンでは若い僧侶の修了課程として三年以上の瞑想修行が義務づけられます。この種の悟りをめざす長期の瞑想は白い壁の瞑想洞穴でおこなわれる一方、黒い壁の瞑想洞穴ではボン教の神靈を調伏するため高僧が数ヶ月瞑想します。仏教側から悪者扱いされているボン教の神靈を浄化し、仏教側の守護神として再生するための瞑想です。こうした「ブータン仏教の調伏」が現在の私の研究主題です。このように、私の仏教研究は正統的な經典解釈などからかけ離れた民族建築／建築考古学的なものですが、仏教という主題の周縁をおもに民衆レベルから捉えていきたいと考えています。チベット・ブータン地域にはとくに興味をもっていますが、これまで六年連続で通いながらさっぱり語学が身につかないでの、還暦の手習いで、なんとかチベット語かゾンカ語の基礎を身につけたいと秘かに念じているところですが、いつもとおり口先だけで終わりそうな予感をひしひし感じております。どなたかお導きを！

# 中村元記念館通信

二〇一八年  
七月発行  
第十一号

〒六九〇一一四〇四  
島根県松江市八束町波入二〇六〇番地  
TEL 〇八五二一七六一九五九三  
FAX 〇八五二一七六一九六九三

## 東方学院松江校ガイダンス 開催（二〇一八年四月十四日（土））

今年度のガイダンスは前田専學館長の挨拶を丸井浩先生が代読され、清水谷善圭理事長が挨拶した後、釈悟震先生を始めとした十名の先生方による講義の紹介が行なわれました。雨の降る中来館された熱心な研究会員の皆様が耳を傾けておられました。

今年度の講義から、早割制度を設けました。今申し込めばお得な講義も多数ありますので、ご興味のある方は記念館までお問い合わせください。

## 大根島ばたん祭開催

（二〇一八年四月二十八日（土））

記念館ステージには、「しまねガムラン」の皆さんにご登場いただきました。鮮やかな民族衣装を纏つた演奏者の皆さんのがインドネシアの楽器を奏で、会場は不思議な心地よい音色でいっぱいになりました。「しまねガム



能海寛生誕150年特別展  
「チベット仏教求法僧・能海寛と中村元博士」  
大好評展示中！（8月31日まで）



去年八月から行われた八束複合施設大規模改修工事が無事に今年の三月に終わり、松浦正敬市長を始めとした関係者の方々と共に、当館の谷口博則副理事長がテープカットを行いました。公民館・八束支所との連携を深め、さらなる発展に努めたいと思います。

## 八束複合施設竣工式開催

（二〇一八年五月一日（金））

「ラン」の代表は、東方学院松江校で『アジアの風土と民族音楽』音楽で旅』の講義をされている瀬古康雄先生です。冬の間、中村元記念館のセミナーへウス「はじめハウス」で、今回のシルクロード仏跡の講義を重ねてくださいました。



発行／2018年7月 発行所／NPO法人中村元記念館東洋思想文化研究所

## 中村元記念館

〒690-1404 島根県松江市八束町波入2060番地

TEL 0852-76-9593 FAX 0852-76-9693

■開館時間：10:00～18:00（入館は17:30まで） ■入館料：無料

■閉館日：月曜日、夏季休館（8/13～8/15）、年末年始（12/28～1/4）、蔵書整理期間



E-mail: info@nakamura-hajime-memorialhall.or.jp

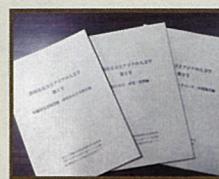
Facebook: https://www.facebook.com/nakurahajimekinenkan

一部からご好評をいただきました「学芸員だより」、第二回は写眞の『津田左右吉とアジアの人文科学』シリーズの紹介から始めたいと思います。こちらは早稲田大学人文学術院様から記念館にご恵贈賜りました。改めて御礼申し上げます。

津田左右吉博士（明治六年～昭和三六年）は、『日本書紀』『古事記』を研究された歴史学者であり、日本思想の通史として『文学に現れたる我が国民思想の研究』を物された思想史家でもあります。ながく早稲田大学で東洋史、東洋哲学を講じられ、中村元博士もその著作『聖徳太子』の中で津田博士の業績に言及しておられます。本シリーズは、津田博士が亡くなられた後、ご遺族から早稲田大学図書館に寄贈された津田博士の旧蔵書の目録である『第一号 早稲田大学図書館 津田左右吉文庫目録』とその調査報告書である『第二号 津田左右吉 研究・資料編』、『第三号 東アジア留学生データベース 中間報告書』からなり、なお継続した研究が行われています。津田史学・思想史学の入門書としては、岩波文庫の『津

田左右吉歴史論集』を手に取ることであります。（略）現代の社会においては、個人の生活とともに個人の力のみでは嘗みがたいことのあるのは事実であるから、そこに社会としてはその力をはたらかせねばならぬところがあるが、個人としては「人」としての権威があり、責務があり、道徳の基礎もある。社会構造の欠陥ということも考えられねばならぬが、個人が自己の責任を無視するならば、如何なる社会構造の下においてでもその人の生活は決して安全には嘗まれぬ。（略）群衆の力にひきまわされ、世間の風潮におし流されたりして、自己を失い「人」を失つたのでは、歴史は解せられず歴史を叙述することはできぬ。歴史の学に

おいて「人」を回復せんとするには、歴史家みずからが先ず自己自身において「人」を回復しなければならぬ。」



最後に前回の「学芸員だより」を読まれた熱心な研究会員の方から「中村博士の蔵書について語つてくれ」とのご意見を頂戴しましたので、僭越ながら一言だけ。中村元記念館が所蔵する中村博士の蔵書は、図書館が購入し廃棄する貸出用の図書とは本質的に異なります。

これは中村博士も寄稿されたことのある雑誌『心』に昭和二七年三月から五月にかけて掲載されたものです。最近の過労死、公文書改ざん、アメフトの事件を引き合いに出すまでもなく、私たちに「人がいかに生きるべきか」を問い合わせるものといえるでしょう。

中村博士が設立された東方学院の目指すところもまた、そうした「人間の回復」にあり、有難いことに松江校で開講している私の「歴史学入門」講座も二年目を受けて、自己を失い「人」を失つたのでは、歴史は解せられず歴史を叙述することはできぬ。歴史の学に

中村博士の蔵書は、中村博士が所有し現在のインド哲学・仏教学をはじめとした東洋思想研究の礎を築いた歴史的文化遺産であり、博士に続く研究者にとって、それらの実りを享受できる私たちにとても、無限の価値を持ち得るものです。記念館が松江市をはじめ全国の支援者様からの協力を得られているのは、ひとえに中村博士が松江名譽市民を贈られた世界的な学者であり、その遺産を博士の原郷である松江で伝えていくことが意義あることとして支持されているからでしょう。皆様には改めて中村元記念館へのご理解とご協力をお願いする

次第です。



## 東方学院松江校 研究会員の声

以前からご要望のあった、東方学院松江校で学ぶ研究会員のコナーを、今回より新連載いたします！

赤井厚生さん



「人身得ること難し、仏法倣うこと希なり」

他人からこんなことを聞かれることがある。お前その齢になつて今更、仏教の勉強などして何の為になるのか？と。

冒頭の話は『曹洞宗修証義』の最初に出てくる部分である。意味は何万分の一、いや何億分の一であり、ましてや仏教に接することなど極めて稀である。ならば折角のチャンスを無為に遣り過してはならない。

仏教を学んで何の得があるのか、そんなことなど最初から一切考えることなどない。只それについて学ぶ、目的や効果など考える必要はない。

やや挑戦的な言い方になるけれども、私も七十五年生きてきた。振り返って、役に立つ勉強とは何だっただろうか。役に立つ勉強は

## 東方学院松江校 研究会員の声

研究会員の声

執筆者募集！



東方学院松江校の研究会員の方で、執筆者を募集しています。

・対象：松江校の研究会員

・東方学院で学んだこと、これから学びたいことなどを書いて、記念館にお送りください。

・本人の写真または内容に関するある

・写真

〈郵送先〉

〒六九〇一ー四〇四

島根県松江市八束町波入二〇六〇番地  
中村元記念館 宛

○ハ二一七六一九六九三

定期講義では「能海寛の著書講読」を通し、法を求めて葛藤する明治期の青年僧と対面しています。集中講義では、テレビでしかお目にかかることのない憧れの

中村元先生の故郷に、記念館と東方学院松江校が開かれて五年。私は、初めて文字を習う子の如く、胸躍らせながら通つていま

※紙幅の都合により、掲載にはお時間をいたくことがありますのでご了承ください。